OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	赤染衛門の法華経二十八品歌の表現と詠作情況について
Author(s)	フィットレル, アーロン
Citation	詞林. 2015, 58, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54447
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

赤染衛門の法華経二十八品歌の表現と詠作情況について

フィットレル・アーロン

はじめに

一条朝歌壇の女房歌人の中で和泉式部に並ぶ評価を得ていた赤染衛門は、法華経二十八品歌と維摩経十喩歌を詠進して、藤原公任、選子内親王、藤原長能らとともに釈教歌を残した最初の人物の一人であったが、彼女の釈教歌について詳しい論考がまだなされていない。

『赤染衛門集全釈』[1]の法華経二十八品歌の【参考】に、二十八品歌の成立背景に関して以下のように述べられている。

法華経二十八品歌となると、今にその全容を伝えるものとしては、選子内親王の『発心和歌集』、長能および公任と赤染のあたりが、和歌史上先駆的な意味を持つと思われる。これらの成立や詠歌背景については、未詳であるが、『本朝文粋』巻十一に所収されている、藤原有国作の「讃法華経廿八品和歌序」は、これらについても、一つの示唆を与えるであろう。すなわち、「讃法華経廿八品和歌序」に拠ると、「和歌の長い歴史の中でも、未だ、『法華経』を以って、題と為したものはなかったが、東三条院詮子崩御の諒闇中にあたり、かねて『法華経』信仰の厚かった藤原道長が、詮子の旧臣・わが近親の者を集めて、『法華経』の諸品を採って和歌の題とし、歌詠を成し併せて『法華経』の弘布を成さんとした。」というのである。（中略）主催者は、道長、歌詠の諸卿は、藤原公任・藤原斉信・源俊賢・藤原行成の面々であったと伝える。『権記』長保四年（一〇〇二）八月十八日条には、これと付牒を合わせるように、「詣左府、有二十八品和歌事、大弼（筆者注、有国）作序、入夜罷出」と見え、その成立の時期を把握することができる。

また、『栄花物語』「うたがひ」巻に見られる道長家の法華経歌会についての記事と中世の勅撰集に収録されている道長らの法華経歌について言及し、赤染衛門の法華経二十八品歌に関して、

赤染の「法華経二十八品歌」は右にいうところのと同一のものかどうかは不明であるが、やはり、個人的な独詠と考えるより、道長の仏事善業と併せ、道長の命によりそれに応じて詠進したものとみるのが、自然であろう。と推測している。

赤染衛門の法華経二十八品歌について、経文引用箇所の検出と語釈はなされているものの、その特徴と成立情況に関してはまだ詳細に検討されていない。そこで、本稿ではこの二点を中心に考えてみたい。

一、赤染衛門の法華経二十八品歌の特徴

一―一、法華経歌の詠作方法

一条朝の歌人の中で法華経二十八品歌がほぼ完全な形で残っている歌人は赤染衛門と藤原公任と選子内親王と藤原長能であるため、今回はこの四人の法華経二十八品歌を比較して、完全な形では残っていない他の同時代の法華経歌も参考にして赤染の法華経歌の特徴を押さえたい。

最初に、その詠作方法について検討したいが、経典の扱いの面から二種の方法が認められる。その一つは、選子内親王の『発心和歌集』のように、経典の一部を題とする方法であり、いま一つは、公任や赤染や長能のように経文題を立てない方法である。[2]前者の場合、経文題を釈教歌にしたてる、またはそれを踏まえて釈教歌を詠むことが常套で、題とした経文の前後を含める例もあり、このような詠作は檜垣氏も指摘するとおり、経典理解の深さも示している。後者の場合は、経典または当該品全体の内容を釈教歌にまとめる例も少なくないが、前者のように経典の一部分のみを踏まえる例も多い。赤染と公任と長能も経文題を立てていないが、当該品の内容をまとめる方法と当該品の特定の経文を踏まえるという方法もとっている。また、釈教歌の表現の面から凡そ三種の方法が見られる。一つ目は経文の表現を和訳して詠出すること、二つ目は経文から離れて、叙景的表現を使用して詠作すること、三つ目は詠者の感慨を詠み込む方法であるといえよう。紙幅の都合上、それぞれの方法の一例のみ取り上げることにし、赤染と同時代歌人の比較に関して詳しくは表一～四、それぞれの本文は表「一条朝歌人の法華経二十八品歌」を参照されたい。

一つ目の方法として、特定の経文を踏まえて詠出することをあげたい。たとえば赤染の勧持品題の歌は、以下のようになっている。

身にかへて法をおしまんためにこそしのびがたきをしのびてもへめ　（四三九）[3]

この歌は勧持品の次の偈の傍線部を和訳して詠んでいる。

我等敬信佛　當著忍辱鎧
爲説是經故　忍此諸難事

我不愛身命　但惜無上道[4]

当該品の内容を歌でまとめる例として、赤染の陀羅尼品題歌があげられる。

法まもるちかひをふかくたてつればすゑのよまでもあせじとぞ思ふ　（四五二）

この歌は、薬王菩薩と勇施菩薩と毘沙門天王と持国天王と十羅刹女等が仏に『法華経』の護持を約束して陀羅尼呪を唱えるという陀羅尼品の内容を釈教歌にしている。このように経典のある程度広い範囲を詠み込む場合は、経典の該当箇所に見られない表現、また経典にない表現も入ってくることが多く、赤染の右の歌の「あせじとぞ思ふ」という表現に当てはまる語句も『法華経』陀羅尼品に見られない。ただし、このように経文からいささか離脱するような歌は、赤染よりも公任の法華経歌に多い。たとえば、公任の勧持品題歌は次のようになっている。

さまざまにうき世の中を思ひつつ命にかへて法ををしまん　（『公任集』二七二[5]）

上句の「さまざまにうき世の中を思ひつつ」という表現は全て純粋な和歌表現で、経文の語句の和訳ではない。これに対して赤染は全ての歌に経文の表現を多く使用し、経文の表現の和訳のみを用いる例もある。たとえば、見宝塔品の歌はその一例である。

大空にたからのたふのあらはれて法のためにぞ身をばわけける　（四三七）

この歌は見宝塔品の次の二箇所の傍線部を詠み込んでいる。

①　爾時佛前有七寶塔。高五百由旬。縦廣二百五十由旬。從地踊出住在空中。

②　若我寶塔。爲聽法華經故出於諸佛前時。其有欲以我身示四衆者。彼佛分身諸佛。在於十方世界説法。盡還集一處。然後我身乃出現耳。

「あらはれて」という語は引用箇所に見られないが、『法華経』によく見る表現である。また、「たからのたふ」は「宝塔」のことで、「塔」は漢語の形で詠み込まれている。

表現の面で注目されることが二点あるが、その一つは、叙景的に詠んだ法華経歌は一首も見られないことである。表三に示したとおり、公任の法華経二十八品歌に六首、選子の歌に二首、長能の現存している二十六首の中にも二首見られる。たとえば、

序品
くさぐさにちりかふ花はいにしへの風にまかせてふるにぞ有りける　（『公任集』二五九）

法師品
寂寞無人声、読誦此経典、我爾時為現、清浄光明身
そらすみてこゝろのとけきさよ中に　ありあけの月のひかりをそます　（『発心和歌集』三四[6]）

提婆品

みなそこにいかでやとせをすぐしけむかくあきらけきもち月のわの　（『長能集』一五八）

公任の歌には序品に見られる、仏の上に四華が降っている場面が詠まれているが、仏の教えは昔のようであるという経典の内容を「いにしへの風にまかせて」という比喩表現を使用して表している。選子の法師品題歌は完全に風景描写によって題に取り出した経文を詠い、長能の提婆達多品題歌も、成仏した八歳の龍女を「もち月のわ」に譬えて詠んでいる。

赤染の歌の中に授記品を詠んだ「つぎつぎの仏におほくつかへてぞはちすをひらく身とは成るべき」という歌に見られる「はちすをひらく身」という表現は叙景的に見られるが、あるいは授記品冒頭の、上句の典拠でもある、大迦葉が仏に仕えて成仏することが予言される所に見られる「瑠璃為地。宝樹行列。黄金為縄。以界道側。散諸宝華」、また同じ箇所の偈に見られる「常出好香　散衆名華」という文言を意識しているのではないか。一応、蓮は言うまでもなく『法華経』に頻出する語であり、この歌も経典の表現の域を出ていないと言えよう。したがって、赤染の法華経歌は全て経文に寄り添い、その表現を和訳して忠実に釈教歌にしたてている。和歌中のほぼ全ての表現が経文に確認できる詠は十三首見られ、公任（四首）や選子（五首）、長能（三首）より甚だ多い。また、他の十五首にも経典に見られる表現が多く、『法華経』の本文を直接参考にしていたことが窺われる。

ただし、このように経典の内容を直叙する歌の中で、例外となる一首は、自分の感慨を詠み込む観世音菩薩普門品題歌である。

身を分けてあまねくのりをとく中にまだわたされぬわが身かなしな　（四五一）

釈教歌という題詠に詠者自身の感慨が出現する例は和歌史上珍しい。石原清志氏は『発心和歌集』の特徴の一つとしてこの点を指摘している。[7] 比較のために、法華経二十八品歌に限って見ると、選子の二十八首中に自分の感慨を詠み入れる歌は十二首見られ、公任と長能の法華経歌には一首もない。赤染の観音品題の歌については二―四に後述する。

一―二、後代の法華経二十八品歌との比較

次に、後代の歌人の二十八品歌の表現について言及したいが、法華経歌の表現史について錦仁氏は、公任、赤染、選子らの法華経歌と寂然、俊頼、西行、慈円のそれを比較すると、「時代を追うにつれて、歌に占める自然・風景の割合がしだいに増大してくる」と述べ、西行に至って、二十八品歌は純粋な風景描写になると指摘する。[8] この傾向を示すために、錦氏は主な二十八品歌の中から薬草喩品詠をとりあげる。

1　一つ色に我が身うつれど花の色も西にさす枝や匂ひ増すらん（選子内心王・譬如大雲以一味雨　潤於人花　各得成実）

2　一つ雨に閏ふ草木は異なれど終にはもとに帰らざらめや

（公任）
3　法の雨は草木も分けで注げどもおのがじゝこそ受けまさりけれ（赤染衛門）
4　春雨は野辺の草木も分かねども染むる心の変はる也けり（寂蓮・草木麁林　随分受閑）
5　春雨はこのもかのもの草も木も分かず緑に染むるなりけり（俊頼・无有彼此　愛憎之心）
6　ひき〳〵に苗代水を分けやらでゆたかに流す末を通さむ（西行・我観一切　普皆平等　無有彼此　愛憎之心）

平安中期以後の時代は錦氏の指摘するとおりであり、詳しく検討しないが、一―一の網羅的な検討から明らかなように、経典の表現からの離脱と叙景的な作風は既に平安中期に始まり、前掲した公任の序品題歌や選子の法師品題歌や長能の提婆達多品題歌や、同じく長能の化城喩品題の「いまぞみる花のみやことくさまくらまきしたびねのやどりなりけり」などは、ほぼ純粋に風景を詠んでいるため、一条朝歌人の間にも格差が見られると言わざるをえない。その中に、このような風景描写が一切見られず、経典に最も忠実な歌人は赤染衛門であるが、以上のような表現史の展開と見合わせると、彼女は法華経二十八品歌の表現史の中でも、最も経文に忠実に詠出する歌人であったと位置づけられる。

一―三、『法華経』の深い読誦

以上のように、赤染衛門の法華経歌の最も顕著な特徴として、経文の表現への忠実性が押さえられる。さらに、引用箇所が各品の中でどこに位置するのかという観点から見ると、当該品の冒頭に位置する経文を引用した歌は八首、末尾に位置する経文を詠んだものは六首、中程に位置する経文を詠んだ歌は五首、冒頭と中程の二箇所と、冒頭と末尾の二箇所にある経文を詠んだ歌はそれぞれ一首見られ、残りの七首は経文の内容を詠んだものである。したがって、各品の長短に差異があるとはいえ、典拠からの検出が簡単であると思われる冒頭と末尾に位置する箇所を引用する歌が最も多いが、経文をよく知らなければ検出しがたい、当該品の中程の経文を釈教歌にしたものも五首見出せる。その中から『法華経』のよく知られている法華七喩の一つに基づく譬喩品歌を除くと四首となり、さらに公任の歌と引用箇所が一致し表現も似ている方便品と普賢菩薩勧発品の歌を除くと、次の二首が残る。

序品
いにしへのたへなる法をときければいまのひかりもさかとこそみれ（四二七）

安楽行品
名をあげてほめもそしらじ法をただおほくもとかじすくなくもなし（四四〇）

序品の歌は序品の次の箇所を詠んでいる。

諸善男子。我於過去諸佛曾見此瑞。放斯光已即説大法。是故當知。今佛現光亦復如是。欲令衆生咸得聞知一切世間難信之法。故現斯瑞。

表一と本文の比較からも明らかなように、一条朝歌人の現存する二十八品歌の中でこの箇所を詠んだのは赤染衛門のみであり、先行の歌はなかったことにも注意しておきたい。

また、安楽行品の歌は、安楽行品の二箇所を引用しており、初句と第二句は、

又文殊師利。如來滅後。於末法中欲説是經。應住安樂行。若口宣説若讀經時。不樂説人及經典過。亦不輕慢諸餘法師。不説他人好惡長短。於聲聞人亦不稱名説其過惡。亦不稱名讀歎其美。又亦不生怨嫌之心。善修如是安樂心故。諸有聽者不逆其意。有所難問。不以小乘法答。但以大乘而爲解説。令得一切種智。

という箇所の傍線部を直叙し、第三句以下は、

於一切衆生平等説法。以順法故不多不少。乃至深愛法者。亦不爲多説

という所を直叙する。この品においても、公任と選子はともに「常好坐禪。在於閑處修攝其心」という、説法者の安住と座禅といった正しい修行の仕方についての仏の教えを詠み込み、長能は同じ所の「心亦不驚。又復於法。無所行」という箇所を詠んでいると思われるため、これも同時代歌人の中で赤染独自の引用箇所である。

また、赤染の法師功徳品題歌は以下のようになっている。

たもちがたきのりをかきよむむくいにはみぞすみきよきかがみなりける　（四四五）

初句に見られる「たもちがたき」という表現は当該品に見当たらないが、見宝塔品の最初の偈に「此經難持　若暫持者我則歡喜　諸佛亦然　如是之人　諸佛所歎」と見られ、ここの表現を意識しているのではないか。「のりをかきよむ」という句は当該品の次の箇所の傍線部を和訳している。

若善男子善女人。受持是法華經。若讀若誦若解説若書寫。是人當得八百眼功德。千二百耳功德。八百鼻功德。千二百舌功德。八百身功德。千二百意功德。

「むくい（報）」も『法華経』の経文にしばしば見られる。なお、下句は右の箇所から離れた、当該品の中程にある第五の偈に見られる、

若持法花経　其身甚清淨
如彼淨琉璃　衆生皆憙見
又如淨明鏡　悉見諸色像
菩薩於淨身　皆見世所有
唯獨自明了　餘人所不見

という所の傍線部を引いているため、法師功徳品題歌も経文の検出しがたい箇所を引用して直叙する。

ちなみに、赤染の二十八品歌の中で右の安楽行品と法師功

徳品の歌のように二箇所の経文を詠み込んでいる歌は、表二にも示したとおり、合計五首見られる。

このような引用態度を見ると、赤染は『法華経』そのものの表現を用い、当時の釈教歌詠出の常套的な表現と引用箇所と異なる詠作も見出せることから、『法華経』をよく読み、その本文の表現をよく知っていたことが窺われる。詠者の信仰の度合はこういった詠作からは知られず、必ずしも経典の理解が深かったとは断言できないが、これほど詳細に『法華経』の表現に馴染んでいたことは、『法華経』への篤い帰依も思わせるのではないだろうか。

二、赤染衛門の法華経二十八品歌の成立情況

選子内親王の『発心和歌集』は、後に引用する序文から明らかなように、選子自身の極楽往生のための功徳として、寛弘九年（一〇一二）に成立した。また、長能の法華経二十八品歌は、家集の「ある人の御れうに、法花経廿八品によせて」という詞書からわかるように、おそらく高貴な人のために詠まれたものであり、公任の歌も、最初に引用した『全釈』など、先学論者に指摘されているとおり、東三条院詮子中宮のための長保四年八月の追善法華八講に詠まれたと考えられる。[9] しかし、赤染衛門の家集に法華経二十八品歌の前には、「法華経の心を詠みし」（類纂本系諸本の本文に「法華経の心よみしに」）と書かれているのみであり、勅撰集に入集している歌にも品名のみが見られ、詠作情況は明確ではない。本章では、第一章に見てきた表現の特徴と、釈教歌の詠作場面を参考にして赤染の法華経歌の成立情況について考察したい。

二―一、公任の二十八品歌との近似性について

これまでの研究で赤染の法華経歌が公任と同じ東三条院の追善法華八講の場で、あるいは道長の仏事善業に併せて詠まれたと考えられてきたのは、主に公任の歌の表現と引用箇所との近似性と、赤染の道長家での中心的な役割をもとにした推測であろう。確かに、公任と赤染の歌を比較すると、たとえば如来神力品や薬王菩薩品を詠んだ歌の引用箇所と趣向は一致し、また特に嘱累品題の歌に、当該品の経文にない「えがたき」と「うることかたき」という同一表現も、二人の歌に見られる。

ながれてもあだにすなとぞかき撫づるうることかたき法をとけとて　（『赤染衛門集』四四八）

いただきを返す返すぞかきなづるえがたき法のうしろめたさよ　（『公任集』二八一）

ただし、このような近似性から、同じ席で詠まれていたとは必ずしも言えない。たとえば、公任と同じときに法華経歌を詠んだと考えられている道長の授記品題歌は経文の引用箇所と表現も（赤染の序品と安楽行品の歌と同じく）公任のと異なる。

たねくちてほとけのみちにきらはれし人をもすてぬのりとこそきけ　（『万代集』釈教歌・一六六二）

あらためて深き心をさとりぬるしるしをけふはうるにぞ有りける　（『公任集』二六四）

一方、明らかに成立を異にする選子と公任の二十八品歌を比較すると、五百弟子品題の歌の結句の表現が似ていることが見られる。

きてふしてとこゐひなれば衣手にかかる玉ともさめてこそ見れ　（『公任集』二六六）

ゐひのうちにかけし衣のたまたまもむかしの友にあひてこそしれ　（『発心和歌集』三二）

また、勧持品題の歌に、経文の「難事」を「うき世の中」と「うきこと」という類似する表現で表した点も一致するといってよい。

さまざまにうき世の中を思ひつつ命にかへて法ををしまん　（『公任集』二七二）

為説是経故、忍此諸難事、我不愛身命、但惜無上道

うきことのしのび難きをしのびてもなほこの道ををしみとどめん　（『発心和歌集』三七）

このような現象は、岡崎真紀子氏も公任と選子の右の勧持品題歌に関して述べているとおり[10]、むしろ当時の法華経歌の詠作方法と表現の定形を示していると考えられる。また、公任の法華経歌の作風と表現が他の同時代の法華経歌にも見られるということは、『栄花物語』「うたがひ」巻に公任の法華経歌について、「皆経の心を読ませたまふに、四条大納言の御歌の、なかに世に伝はり興を留めたり[11]」と書いてあることと関係があるのではないだろうか。つまり、赤染衛門も、親交があった公任の広く流布していた二十八品歌を手本にしたということが考えられる。

二―二、公任の二十八品歌の形式

『公任集』の法華経二十八品歌の最後に、次の歌が見られる。

これはかきたまへりけるおくに

のりほむることはゆかねど静なる光のうちはてらさざらめや　（二八八）

したがって、二十八品歌を詠み終えた後、跋文のような謙遜的な歌で法華経讃嘆の歌を締めくくるが、このような形式はおそらく道長主宰の法華経歌会に一般的で、他の参加者の全歌が残ってはいないが、公任のような跋文めいた歌があったのではないか。それに対して赤染の二十八品歌の最後にはこのような歌はないことからも、その成立は公任の歌と別の機会であったことが推察されよう。

二―三、大江匡衡の尾張守任期と赤染の同行

公任らが二十八品歌を詠進した東三条院の追善法華八講は、前記の『権記』の記事によると長保四年八月十八日に行われ

たが、この法華八講に赤染衛門はおそらく参加しなかったと思われる。それを傍証するのは、夫大江匡衡の尾張守の任期であり、赤染が夫に同行したことは『赤染衛門集』からわかっている。

匡衡の尾張守任期は長保三年正月から寛弘二年三月まで[12]で、赤染の歌をほぼ年代順に収める雑纂本系『赤染衛門集』に、赤染衛門も同行したことが見られる。

尾張へくだりしに、七月朔日ころにて、わりなうあつかりしかば、逢坂の関にて、し水のもとにすずむとて

越えはてばみやこも遠くなりぬべし関の夕風しばしすずまん　（一六九）

くににて、はる、熱田の宮といふ所にまうでて、みちに、うぐひすのいたうなくもりをとはすれば、「なかのもりとなんまうす」といふに

鶯のこゑする程はいそがれずまだみちなかのもりといへども　（一七八）

道貞くだるとて、みちなれは、尾張にきて物がたりなどして、「かく、はるかにまかる事の心ぼそき事」などいひて、かへりぬるに、さるべき物などやるとて

ここをただ行くかたのとはおもはなんこれよりみちのおくとほくとも　（一八五）

途中の上洛も考えられないことはないが、一六九番歌の詞書に、長保三年七月の尾張下向が見られ、一七〇～一七七の八首も下向のときに詠んだ歌で、一七八番歌はおそらく翌四年の春の熱田神社への参拝のとき詠まれたものであり、一八五番歌は寛弘元年（一〇〇四）三月ごろ（『全釈』所引の『御堂関白記』三月十八日条）、陸奥下向中の橘道貞を匡衡夫妻が尾張に接待したときの歌である。この時期の歌の中に上洛のときのものと思われる詠はなく、『本朝文粋』巻十三に見られる、寛弘元年十月十四日に書かれた匡衡の「於尾張国熱田神社供養大般若経願文」から考えても、熱田神社で大般若経を供養した寛弘元年十月に匡衡（と赤染）はまだ尾張にいたと想定でき、匡衡の尾張守任官中は二人とも上洛していなかったことが充分考えられる。

また、匡衡の二度目の尾張守任命は寛弘六年（一〇〇九）十月で[13]、『赤染衛門集』にはこのときの旅の歌も見られる。

尾張になりて、めづらしげなうものうき心ちして、十月にくだりしに、せき山のもみぢの、袖にちりかかりし

あぢきなくたもとにかかる紅葉かなにしきをきてもゆかじと思ふに　（二三八）

又の年の春、丹波になりかはりてのぼりぬ。殿の三十講にまゐりたるに、道雅の君の、あはれなるいろにて、つぼねのまへにわたり給ひしに聞こえし

すみぞめの袂になると聞きしよりも見しにぞふぢのいろはかなしき　（二四八）

二四八番歌は、匡衡が翌寛弘七年の春、丹波守に任命されたときの尾張からの上洛であり、赤染がこの一年間も夫と尾張へ下向していたことがわかる。

要するに、東三条院の追善法華八講が行われた長保四年八月に赤染は都にいなかったと思われる。むろん、依頼されて尾張から送った可能性もあり得ないことではないが、当該儀式に参加することもできない女房に、当時男性の支配下にあり、基本的に男性中心であった仏事での和歌の詠作を依頼することは考えにくいだろう。

また、前節に指摘したとおり、赤染の二十八品歌の中に叙景的な歌は一首も見られず、全て経文に忠実であり、ほぼ全ての言葉が経典の言葉の和訳であるのに対して、公任の二十八品歌には風景描写を使用して経典の内容を表す例と、経文に見られない、和歌に相応しい表現を用いる例が何首かある。歌会という場で釈教歌を詠む場合、最も重点が置かれていたのは経典の讃嘆と文学性であったと考えられ、一条朝の歌人たちは経文におおむね忠実ではあったが、法華八講での詠出のとき、叙景的な作風を心掛けていたことが見られる。公任や赤染の時代にも経文の表現から離れる詠作方法が評価されていたことは、『袋草紙』の有名な和泉赤染優劣論に、和泉式部の「くらきより」詠に関しての公任の定頼への説明も物語っている。すなわち、「『くらきよりくらきみち』は経文なり。いかで思ひよりけんとも思ふべからず。末の『はるかにてらせ』はかれに引かれて出で来れる詞なり」[14]といって、歌に詠者の発想が大切であると述べる。ちなみに、道長の現存する六首の法華経歌の中にも叙景的に詠まれている例は見出せる。

寿量品

人めには世のうき雲にかくろへて猶すみわたる山のはの月　（『続後撰集』釈教歌・五九八）

赤染も公任等の法華経歌を見ていたようであるにもかかわらず、その叙景的な作風に習わなかったことから、彼女の二十八品歌は高い文学性を要求している講説の後の歌会での詠出ではないことが窺われるのではないだろうか。ただし、これを最もよく示しているのは観世音菩薩普門品題の歌であろう。

二―四、赤染の観音品題歌

前節に触れたとおり、二十八品歌を法華経歌会で詠進した公任と、人の依頼に応えて詠んだ長能の歌に、詠者自身の感慨ないし述懐を詠み込む歌はなく、他の一条朝の歌人の現存する法華経歌にも見出せない。詠者の心中を詠む歌は『発心和歌集』の特徴で、赤染衛門の二十八品歌の中にも観音品題の歌は経典の内容から離れて、彼女自身の述懐を詠んでいる。

二―四―一、赤染の観音品題歌の解釈

まず、赤染の観音品題歌を再掲する。

身を分けてあまねくのりをとく中にまだわたされぬわが身かなしな

観音品題歌の下句に見られる「まだわたされぬわが身かなしな」という叙述に関して『全釈』の【語釈】に、「これに拠れば、赤染の『法華経二十八品歌』の成立は、赤染出家以前のものといえようか」と述べられている。また、同じ『全釈』にこの歌の口語訳も、おそらく以上の推測を前提にして、「観音菩薩は、その身を三十三に分けて、一切衆生のために広く仏の教えを説かれたのに、それでもなお、まだ得度できないでいる自分の身は、なさけないことよ」となっている。つまり、「わたす」を実際に赤染自身が得度することと解している。この歌の踏まえている経文は『全釈』にも示されているとおり、もし仏、辟支仏……執金剛によって救われるべき人があれば、観世音菩薩はそれぞれの身（三十三身）に変化して本人に法を説くということが説かれている部分である。

若有國土衆生應以佛身得度者。觀世音菩薩。即現佛身而爲説法。應以辟支佛身得度者。即現辟支佛身而爲説法。……應以執金剛身得度者。即現執金剛身而爲説法。

歌の「身を分けてあまねくのりをとく」という部分は確かに、身を三十三に分けて一切衆生のために法を説くというように解釈できる。ただし次の「中に」は、観世音菩薩の三十三身のいずれかによって救済（「得度」）される人々の中にまだ入っていないということを表しているのではないか。第四句の「わたす」という語は経典に見られる「得度」の和訳であるが[15]、仏教に関する和歌を見てゆくと、経典の「度・得度」という表現のように此岸から彼岸へ渡す、または煩悩から解脱させるという意味で詠まれている。

往生講の式かき侍りけるとき、教化のうたとてよみ侍りける　律師永観

みな人をわたさむとおもふ心こそ極楽へゆくしるべなりけれ　（『千載集』釈教歌・一二五五）

普門品

弘誓深如海

ちかひける心のやがて海なれば人をわたすもわづらひもなし　（『長秋詠藻』下・四二七）

（寿量品）

同品、為度衆生故、方便現涅槃の心を

花のちり紅葉ながるる山川も人をわたさんためとこそきけ　（同・四六七）

末法万年、余経悉滅、弥陀一教、利物偏増

むろをいでしちかひのふねやとどまりてのりなきをりの人をわたさん　（『聞書集』三五）

赤染は、観音菩薩が衆生を救済（得度）するという観音品

の語句を踏まえて、自分が観音菩薩に救済されるべき衆生の中にまだ入っていないということを詠んでいるのであろう。すなわち、この歌は、「（観世音菩薩が）身を分けて一切衆生に法を説く、その（救われるべき衆生の）中にまだ渡されていない（入っていない）我が身が悲しいことだ」と解釈できよう。観音品は右の部分の後、以下のように続く。

是觀世音菩薩。成就如是功徳。以種種形遊諸國土度脱衆生。是故汝等。應當一心供養觀世音菩薩。

観世音菩薩はこのようにこの功徳を成就して、種々の形で諸国に現れて衆生を救済するため、一心に観世音菩薩を供養すべきだと述べている。赤染のこの歌は、経典を踏まえて自己の述懐を述べている点から、観音品全般を理解したうえで詠まれているといえるため、この部分も意識していたと考えて差支えないだろう。したがって、赤染は救済のための修行が足りない、また煩悩がまだ深いということを反省して悲嘆しているように理解できるが、修行の熱心怠慢や煩悩の深浅は出家在家に関わることではないだろう。

出家以前・以後の詠出であるのかを別として、この歌には、観世音菩薩が一切衆生を救済するという、経文に説かれている喜ばしいことと対立する、否定的な内容が詠まれているため、経典の教えを讃嘆する法華経歌会などでの詠出としては相応しくないのではないだろうか。また、男性貴族の法華経歌会の場で女性である赤染に法華経歌を依頼することは想像しがたいとはいえ、女主人の倫子または彰子の依頼に応えて詠んだ可能性も考えられるが、観音品題歌の以上の、自身の述懐を釈教歌に述べているという趣向を見ると、このような成立背景も疑問になり、私的な詠出であると考えざるをえなくなろう。

二―四―二、釈教歌の題詠に詠者の述懐を詠み込むということ

以下、赤染の観音品題歌のように詠者自身の述懐の心が詠まれている釈教歌の平安中期の用例を、その成立背景と目的に注目して検討したい。

その代表的な例として『発心和歌集』があげられるが、その目的は序文に明記されている。

妾久係念於仏陀常寄情法宝為菩提也、（中略）猶梵語者天竺之詞流沙遥隔、漢字者震旦之跡風俗各殊、弟子誕生皇朝受身婦女、（中略）是則所以十方浄土之際、遍発往生之心九品蓮台之上、終殖化生之縁也（以下略）

選子自身の菩提心を発するため、また日本の皇朝に女性として生まれた自分の極楽往生のために編まれた家集であることを述べている。そうして、自己の感慨を詠んでいる歌の中に、赤染の観音品の歌と同じく、序品、法師功徳品、観音品、普賢菩薩品の歌のように、経旨から離れた述懐的な詠も見られ、法華経二十八品歌以外の歌の中にも見出せる。

『発心和歌集』の他、自己の述懐を詠んでいる釈教歌の例として、釈教歌よりもむしろ経典の内容を踏まえた述懐歌ではあるが、『成尋阿闍梨母集』の法華経歌がある。

世中いとどかきくらす心地して、経をだによみて念じたてまつらんとすれど、それもいとくるしうて、よみもやられ給はず、日かずのみふるに、こころのうちにおぼゆること、これはつみにやとおそろしけれど、すこしもなぐさめに

一巻
ちりにける花のをりみぬそのうきにいとどこずゑのはるかなるかな

二巻
ちりはらふいへのあるじもわがごとやまどひたるこはゆかしかりけん

三巻
ひとつあめのしたにぬれどもいかなればうるはぬくさのみとなりにけん

四巻
ゑひさめてのちにあはずはいかでかはころものうらのたまをしるべき

五巻
君にこそふたつのたまはまかせしかいつつのさはりとどめてきとて

六巻
おろかなるこころとともときしかどこははるかにぞいくくすりなる

七巻
ゆく人はうれしきふねとおもふともとまれるかたのうらめしきかな

八巻
あけくれはあまねきかどをたのみつついでにし人のいるをこそまて

（九六～一〇三）

作者は息子成尋の渡宋のために嘆いている日々の生活の中で怠りがちな修行をしており、詞書に書いてあるとおり、自分の慰めに『法華経』を踏まえた歌を詠んでいる。歌の内容を見ても、八首とも法華経の各巻に出てくる内容を踏まえて、息子成尋の渡宋に対する悲嘆や彼との再会への希求を伝えている。その中に五巻にある提婆達多品の龍女成仏についての「君にこそ」の歌にのみ、五障を消滅させるためにといって（龍女の一つの玉だけではなく）二つの玉（二人の息子）を任せました（法師にした）よ、という内容で、自己の極楽往生への志向が詠まれている。

人の依頼に応えて、または経供養のとき詠まれた釈教歌の中に、詠者の感慨が詠み込まれている例も散見されるが、それらは「太皇太后宮五部大乗経供養させ給けるに法華経にあたりけるひよめる」という詞書を持つ「さきがたきみのり

のはなにおくつゆややがてころものたまとなるらん」（『後拾遺集』雑六・一一八八・康資王母）という歌のように、その経典への信心や讃嘆を表しているものである。要するに、作者の述懐や悲嘆を釈教歌に詠み込むことは、個人的な詠歌の特徴であると言えよう。以上の事情を踏まえて、赤染の法華経二十八品歌も主家に主催された歌会や法華八講・三十講、または女主人の経供養などのときに詠まれたものではなく、長年の出家生活を送っていた赤染自身の『法華経』読誦の中での功徳として詠出されたと考えた方がより穏当であろう。

結び

以上、赤染衛門の法華経二十八品歌の表現と詠作方法の特徴について指摘し、赤染の仏道修行としての詠出であるという解釈を提示した。『赤染衛門集』の詞書から彼女の寺院参詣や仏道修行について知ることができるが、その中にも、「ぎだりんに、八講ききしに殿のせむじまうであひて……」（四一六）や、「ある寺に八講せしに、ひごろつぼねならびにていひそめたる人……」（四六五）や、「おなじ人の、講する所にまかりあひて……」（四六六）などのように寺院の講説を聞いたこともあったが、二十八品歌がこのどれかのときに詠んだものなのか、日ごろの『法華経』読誦のときの詠なのかについて知る術はない。なお、前述のとおり赤染の仏道信仰のあり方に関してはこの二十八品歌からは考察することはできず、日常詠の何首かの歌から、その様子が窺われるのであるが、これに関しての考察は別稿にゆずりたい。

注

（1）私家集全釈叢書1、関根慶子・阿部俊子・林マリヤ・北村杏子・田中恭子著、風間書房、一九九六。以下、『全釈』と略す。

（2）檜垣孝「釈教歌における題詞と詠法について」（『仏教文学』14）

（3）『赤染衛門集』の本文は『全釈』による。

（4）『法華経』の本文は坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』上中下（岩波文庫、一九六九）による。

（5）特に断らないかぎり、『赤染衛門集』以外の和歌の用例は日本文学 Web 図書館所収『新編国歌大観』による。

（6）日本文学 Web 図書館所収『新編私家集大成』選子内親王Ⅲ発心和歌集（冷泉家時雨亭叢書『平安私家集　四』）による。

（7）『発心和歌集の研究』（和泉書院、一九八三）

（8）『法華経二十八品歌の盛行―その表現史素描―』（『国文学解釈と鑑賞』一九九七・三）

（9）ただし、山田昭全氏は勧学会の席に詠まれた可能性もあると指摘している（『講会の文学』おうふう、二〇一二）。一方、『続古今集』釈教歌（七七八）に公任の見宝塔品題歌が「東三条院の御ために一品経供養せられける次に」という詞書で所収されており、『本朝文粋』と『権記』の記事と合致する。また、『公任集』に『赤染衛門集』のように二十八品歌全体にかかる詞書はない。なお、道長と行成と斉信の現存する歌について見ると、『新古今集』に「法

花経廿八品歌、人人によませ侍りけるに」という詞書で道長の提婆達多品歌と斉信の勧持品歌、『新勅撰集』に「法成寺入道前摂政家に、法華経廿八品歌よませ侍りけるに」という詞書で行成の序品歌と道長の五百弟子品歌、『続後撰集』に「人人に同廿八品の歌よませ侍りける時」という詞書で道長の勧持品と寿量品歌、『玉葉集』に「おなじ品（稿者注―方便品）の心を」という詞書で行成の歌、『万代集』に「法成寺入道前摂政、人人に法花経の歌よませ侍りけるに」という詞書で斉信の方便品歌と道長の信解品、授記品、『新勅撰集』のものと別の五百弟子品歌が所収されている。

（10）「『発心和歌集』の詠歌と享受」（『叙説』40）

（11）ジャパンナレッジ所収新編日本古典文学全集32（小学館）『栄花物語』②、一九〇頁

（12）『全釈』は一六九番歌の【語釈】に資料として『中古歌仙三十六人伝』「匡衡」と『本朝文粋』巻七「奉行成状」と『権記』六月二十六日条をあげ、匡衡は着任の手続きのため任国に下向して、一六九番歌の詞書に見られるとおり七月、赤染も連れて再下向することを指摘する。

（13）『類聚符宣抄』八巻に「去寛弘六年正月任尾張守、十月廿八日着任」とある（『全釈』二三八番歌【参考】）。

（14）日本古典文学大系29（岩波書店、一九九五）による。

（15）観智院本『類聚名義抄』（風間書房、一九八六年）に「度」という字に「ワタル」という訓もあげられているため、「わたす」という訓もあっただろう。

赤染・公任・選子・長能の法華経二十八品歌の比較

表一　歌内容・経文引用箇所の一致（凡例　○＝赤染の歌と一致する・×＝一致しない）

品名	公任	選子	長能
序品	×	×	×
方便品	○	×	×
譬喩品	○	○	○
信解品	○	○	×
薬草喩品	○	○	○
授記品	○	○	×
化城喩品	○	×	○
五百弟子品	○	○	○
授学無学人記品	○	×	欠落
法師品	○	×	○
見宝塔品	×	×	○
提婆達多品	× ○	○	○
勧持品	○	○	×
安楽行品	×	×	×
従地湧出品	○	×	×
如来寿量品	×	×	○
分別功徳品	×	×	×
随喜功徳品	○	×	×
法師功徳品	×	○	○
常不軽品	×	×	○
如来神力品	○	×	×
嘱累品	○	○	○
薬王菩薩品	○	×	○
妙音菩薩品	○	○	×
観音菩薩品	×	×	○
陀羅尼品	○	×	○
妙荘厳王品	○	×	欠落
普賢菩薩品	○	○	×

表二　経文の引用方法（凡例　1＝経文の一箇所を詠み込む・2＝経文の二箇所を詠み込む・＊＝当該品の内容を詠む）

品名	赤染	公任	選子	長能
序品	1	1	1	1
方便品	1	1	1	1
譬喩品	1	1	1	＊
信解品	＊	＊	1	1
薬草喩品	1	1	1	1
授記品	2	＊	1	?
化城喩品	1	＊	1	＊
五百弟子品	＊	＊	＊	＊
授学無学人記品	＊	＊	1	欠落
法師品	1	1	1	1
見宝塔品	2	＊	1	1
提婆達多品	1	1 1	1	1
勧持品	1	1	1	1
安楽行品	2	2	1	1
従地湧出品	1	1	＊	1
如来寿量品	＊	1	1	＊
分別功徳品	＊	2	1	1
随喜功徳品	1	1	1	＊
法師功徳品	2	＊	1	1
常不軽品	2	1	1	2
如来神力品	1	1	1	2
嘱累品	1	1	1	＊
薬王菩薩品	1	1	1	1
妙音菩薩品	1	1	1	＊
観音菩薩品	1	＊	1	1
陀羅尼品	＊	＊	1	2
妙荘厳王品	＊	＊	1	欠落
普賢菩薩品	1	1	1	1

表三　経文引用の直叙性

（凡例　○＝経文を直叙する・△＝経文以外の語もある・×＝風物描写がある・◇＝経文の内容・経旨から離脱する）

品名	赤染	公任	選子	長能
序品	○	×	△	○
方便品	△	○	○	△
譬喩品	○	△	○	△
信解品	△	○	△	△
薬草喩品	○	△	×	×
授記品	△	○	○	?
化城喩品	△	△	◇	×
五百弟子品	△	△	△	△
授学無学人記品	△	△	△	欠落
法師品	△	△	×	△
見宝塔品	○	△	◇	△
提婆達多品	△	△ △	△	×
勧持品	○	△	○	○
安楽行品	○	◇	△	△
従地湧出品	△	△	△	△
如来寿量品	△	×	△	△
分別功徳品	△	×	△	△
随喜功徳品	△	○	◇	△
法師功徳品	○	×	◇	△
常不軽品	○	△	◇	△
如来神力品	○	△	△	△
嘱累品	○	△	○	△
薬王菩薩品	○	△	△	△
妙音菩薩品	○	△	△	△
観音菩薩品	◇	△	◇	○
陀羅尼品	△	△	△	△
妙荘厳王品	○	×	△	欠落
普賢菩薩品	△	×	◇	△

表四　詠者の感慨の有無（凡例　○＝詠者の感慨あり・×＝詠者の感慨なし）

品名	赤染	公任	選子	長能
序品	×	×	○	×
方便品	×	×	×	×
譬喩品	×	×	×	×
信解品	×	×	×	×
薬草喩品	×	×	×	×
授記品	×	×	×	?
化城喩品	×	×	○	×
五百弟子品	×	×	×	×
授学無学人記品	×	×	×	欠落
法師品	×	×	×	×
見宝塔品	×	×	○	×
提婆達多品	×	× ×	○	×
勧持品	×	×	×	×
安楽行品	×	×	×	×
従地湧出品	×	×	×	×
如来寿量品	×	×	○	×
分別功徳品	×	×	×	×
随喜功徳品	×	×	○	×
法師功徳品	×	×	○	×
常不軽品	×	×	○	×
如来神力品	×	×	×	×
嘱累品	×	×	×	×
薬王菩薩品	×	×	○	×
妙音菩薩品	×	×	○	×
観音菩薩品	○	×	○	×
陀羅尼品	×	×	×	×
妙荘厳王品	×	×	×	欠落
普賢菩薩品	×	×	○	×

一条朝歌人の法華経二十八品歌

※　『赤染衛門集』、『公任集』、『長能集』の本文と歌番号は日本文学 Web 図書館所収『新編国歌大観』による。『発心和歌集』の本文と歌番号は同所収『新編私家集大成』選子内親王Ⅲ（冷泉家時雨亭叢書『平安私家集　四』）により、本文は冷泉家時雨亭文庫蔵本の影印（冷泉家時雨亭文庫編、朝日新聞社、1993〜）にて確認した。なお、便宜上、詞書の品名を省略した。

品名	赤染	公任	選子	長能
序品	四二七　いにへしるれかこ へのたときまささ のをいもみれ 法ばりそ	二五九　くかへりしせりけ さにちにかる にいまぞ有 ぐ花風 ふのてふ	又林中二をゆみそ 見仏勤ぬもめう 子未求る人ちき 未曾仏夜なにて 曾睡道くすす 睡眠経行 のりをす	一四八　くいろのよかにちるはしきはしみのりりみなりけ 花のあやかひとのこ さくるとつ
方便品	四二八　きいりふつたおまつきひ なたれ とかでかしなのろ いばくりめ みをまし	二六〇　によにもりけ ぞ出三り 世二な こ世ば名 とれき ひてけな りでもり	若供二のむさ 人養六かす 散於画をめ 乱心像りやほ 心乃瀬とけ 乃至見にあ 以無ひ 一数たみ 花仏なて	一四九　ぶれむこがりこ たはにいすねぞ らさみもなる どひつひか にかひか
比喩品	四二九　るでぬはけ ゆいり車り もをとのな 家さつつ のぞみと 火てるひり	二一六　にはりけ でとは有 かど車果ぞ 一みしかの外に つ 開思り	羊車門二とかる 車鹿外七をとま 車汝等出ひなり 大牛来あきけ 牛之車ま、つり 在車たきのけ 今在ありて、り とかしくてのく	一五〇　にけさるとはぁぞ ちじにこに くま心とま すまるさるの りとるくる
信解品	四三〇　とまししかり やでなたづ おらかのゆな にふにもかる だどさらつ	二六二　へしらをの らとつふ すやいけ さおきりさ はりすし 昔ざかれ	示出止二へつかけ 其入宿八しほかや 金皆草草ほとらきや 銀使庵のいのこむ 真令珠知頗ほ、と 珠猶梨にらおも 頗処諸門ひ	一五一　ごかもかるあ れつつひるも ろたなのく もらくおそな きふかつくく 外
薬草喩品	四三あもけしま の木そがそ 法さそのうれ 一はかもこりけれ め向どたさ	二雨はにら つ木終へ と草どか ひふれにや るなとめ 三うともら	譬人二ろほ 如花九みろま 大各得成実 雲得ひとつれにす 以成ついろにさらん 一実わにすやに 味ろいなひ 雨潤於	一五二　すにさかるら ちはさくべ ばのおるあじふ たまるなじ おのなじ ん
授記品	四三二　ぎくつほぞらる ぎおてひ成 つにへをは 仏かすと のつち身き はくべ	二六四　めとをぞ たさしに らをるる あ心しうる きるはけ 深ぬふり 有	若如三ろつ 知以〇しかり 我甘しゆけ 深露ふのり 心灑かそけ 見除らにり 為熱おもす、 授得なり 記清ぬ 者涼こ、れは し	一五三　ひおぬ たぐはは なもよ れわれ へり〔　〕 どいくる しかりし に
化城喩品	四三二　らやめみま しのすのほ こりやきなし かにさやまし てりはにはど へどずちど	二六五　へのかめざ にしやすめ いかしす 契もまにば ら道せ	長夜三きたと 増入一つすら 悪於冥なてん 趣冥くらくたれ 滅永不聞仏くとは 損りぬと 諸天衆名らんん	一五四　ぞやくびなり いまみまたり 花のさしどり るとまやり みこらねのけり くきやり

五百弟子品	ろもざめし こととらされ 四　玉しめうれ 三るてゆそけれ 四もかりてかり	ふなかて てひかめ きゑにさめ 六　こ手もれ 六と衣と見 二してば玉そ れるこ	以無価宝殊繋着内衣裏 嘿与而捨去時臥不覚にかむこ 三二　ゑひのうちにもて けかそしし衣のとれ　ひたもにあひ	一五五　うかの りけるゑかそのけさ こたろをきにけ我 めまとずして
授学無学人記品	ろりこしけ もと是りり 五　さく契な 三にら昔し 四もひはる 四とをそしれ	なの末ぞ た契行に ふのばふ 七　よれゆる 六みけてけ 二が有かね 有りり	世尊慧灯明我聞授記音 心歓喜充満如甘露見灌 三三　あきらけりいかて のこはれ　もろのまし　火やみのせは	本無歌
法師品	みむね事る すしらくな 六　心まとら 三たきとりれ 四がろにのまき べ	とにがべ り外誰す 八　のもりま 二室けす かなかをな 心ら	寂寞無人声　読誦此経浄 典　我爾時為現　清 光明身 三四　そらすみてこ、あを ろのとけの月のひかり そます	一五六　人のか 身のかつはとしは しこりきみろくぞ なせばしみぞ すくなし
見宝塔品	ほららたは おかあのを 七　たのふてぞけ 三にふてぞけ 四ぞらたれにわけ のはめわ	かえもに のたと空 九　そひよを 二六むかく姿な みねしみ	釈迦牟尼仏以右指開七 宝塔戸出大音声 三五　たまのとをひらてふ きしとけぬはもすまと あへしやは	一五七　あらち かねのつにうごる みぐさにかかげ きしはかりけ みだ仏ありけ にぞ
提婆達多品	たをものに わや程り 八　みるはなり 三みのたさにかな 四ついなくかる ほけ	人れだ なみいあり 七〇　道仏のけ 二仏のばり をつれ仏な一 二七ほこし身上れ 二おけてと　蓮こそみ　り分へる さみをか入 さはをかに	皆遥見彼竜女成仏普為喜 時会人天説法心大歓さはは 三六　さめしくふ らぬたるも へとそおも	一五八　みなでぐあち そこにいかすくも やとけむきけわ しきけらの 月のわ
勧持品	にをこたは 身　法人びて 九　をにがて 三へましを 四かしそきみ め	ざ中にし さ世の命を 二　きつ法 二うひて 七に思へん まをかま	為説是経故　忍此諸難惜 事　我不愛身命　但 無上道 三七　うきことのしのもみ ひかたこのみちをしてし と、めん	一五九　人さなむ 仏のみむせ にうけてうるみ はなにのはしる かん　君は
安楽行品	をももをもな 名　ほじほすく 四〇　てらおじな 四げしだかも あそたとく	そもか広 を心ちは 世もて法 三　せひの 七くなし末 二むうひめ てん	在於閑処　修摂其心 安住不動　如須弥山　ももな 三八　さためのりをこき なに心のうちしう ふけれは	一六〇　ともか むるもめてしひ つりおとともふ がほなり ひかりひ 思
従地湧出品	かりかてなん 一　いはやおくなら 四子わむかる 四かおかわや でもからはに	ちおおあし らたイ）はしも 四（はこりを人 七のよにがべ 二ねやいらつ	善学菩薩道　不染世間地 法　如蓮華在水　従 三九　いさきよりもけかれ のむちにもりいに さつのけり	一六一　ほとう りみやいづるをわたれつくわよき なるとうばよき 仏のしそ 人のわ つ

如来寿量品	四四二　ありながらしぬる気色はこのためにとめしくすりをすかすなりけり	二七五　出入ると人はみれどもよとともにわしのみねなる月はのどけし	為度衆生故　方便現涅槃　而実不滅度　常住此説法　我常住於此　以諸神通力　令顛倒衆生　雖近而不見 四〇　そのかみのこゝろまとひのなこりにてちかきをみぬそわひしかりける	一六二　たらちねのくすりをなめむかりそめのみことをきくはかなしかりけり

分別功徳品	四四三　ほとけにてえたるこふすをかぞへずはちりばかりだにしらずあらまし	二七六　聞くままにみな人みちをます鏡行末までもてらしつるかな	雨天曼茶羅　摩訶曼茶羅　釈梵如恒沙　無数仏土来　雨栴檀沈水　繽紛而乱墜　如鳥飛空下　供散於諸仏 四一　いろ〳〵のはなちりくれはくもゐよりとひかふとりとみえまかひけん	一六三　よきことをゆたにたゆたにつくるらんひとことをしるまさらざりけり
随喜功徳品	四四四　よの中にみてしたからをえんよりは法をきくべきことはまされり	二七七　つたへつつあなたふとともいふ人のその一言にしく事ぞなき	世皆不牢固　如水沫泡焔　汝等咸応当　疾生厭離心 四二　かけろふのあるかなきかのよの中にわれあるものとたれたのみけん	一六四　よそへたへ（(ママ)）つたへきけどもうすからずいかなる花のひかりなるらむ
法師功徳品	四四五　たもちがたきのりをかきよむむくいにはみぞすみきよきかがみなりける	二七八　法の雨にみながらきよめつくしてはさはりの外を何か尋ねん	又如浄明鏡　悉見諸色像　菩薩於浄身　皆見世所有 四三　くもりなきかゝみのうちそはつかしきかゝみのかけのくもりなけれは	一六五　のりのゆゑふかきまさしもみてしかなまづ我が君のみすがたをみむ
常不軽品	四四六　みる人をつねにかろめぬ心こそつひにほとけの身には成りぬれ	二七九　うちのるもさてもたねをしうゑつれば終にみ法のむなしからぬを	億々万劫　至不可議　時乃得聞　是法花経 四四　いかにしておほくのこふをつくしけんかつきてたにもあかぬみのりを	一六六　かろしとてかろむ人をもかろまぬぞつひにはおもき心なりけり
如来神力品	四四七　そらまでにいたれるしたのまことをばのりをたもたん人ぞしるべき	二八〇　めづらしくのぶるしたにてみ法をば誠のなかのまことをぞしる	如日月光明　能除諸幽冥　斯人行世間　能滅衆生闇 四五　さやかなる月のひかりのてらさすはくらきみちをやひとりゆかまし	一六七　あだ人のまどふものだにあるものをこわづくりけむことをしぞおもふ
嘱累品	四四八　ながれてもあだにすなとぞかきなづるうることかたき法をとけとて	二八一　いただきを返す返すぞかきなづるえがたき法のうしろめたさよ	如是三摩諸菩薩訶頂而作是言 四六　いたゝきをなてゝをしへしのりなれはこれよりかみはあらぬなりけり	一六九　なれにける人にぞつくるなれらこそあだしごころはあらじと思へば

薬王菩薩品	四四九　ともしつるわが身ひとつのひかりにてあまたの国をてらしつるかな	二八二　あきらかに照すほどにも見ゆるかな身をばをしまで法を思へと	若有女人聞是薬王菩薩本事品能受持者尽是女身後不復受 四七　まれらなるのりをきゝつるみちしあれはうきをかきりとおもひけるかな	一六八　我が君やいまひとたびやいでますとけふのみのりをささげてぞなく
妙音菩薩品	四五〇　ここにのみありとやはみるいづくにもたへなる声に法をこそとけ	二八三　法のためきぬとみれども身をわけていたらぬかたはあらじとぞ思ふ	及衆難処皆能救済乃至於王後宮変為女身而説是経 四八　かくはかりいとふうきみをきみのみそのりのためにとなりかはりける	一七〇　我が君のわが日の本にむまれけむふかきみこころおもひこそやれ
観世音菩薩普門品	四五一　身を分けてあまねくのりをとくわにまだわたされぬわが身かなしな	二八四　よをすくふうちには誰か入らざらんあまねき門を人しささねば	具足神通力　広修知方便　十方諸国土　無刹不現身　種種諸悪趣地獄鬼畜生　生老病死苦　以漸悉令滅 四九　あふことをいつくにてとかちきるへきうきみのゆかんかたをしらねは	一七一　人わたす身にやいくらとひととはばわれこそいはめみそぢあまりに
陀羅尼品	四五二　法まもるちかひをふかくたてつればすゑのよまでもあせじとぞ思ふ	二八五　限なき法の力にときそふるまもりはいとどたのもしきかな	若童男形若童形乃至夢中亦復莫悩 五〇　なにといへどゆめのなかにもあやまちしのりをたもてる人となりなは	一七二　なやますにつみありきとしいふなればたもつ我らはのどけかるべき
妙荘厳王品	四五三　仏にはあふことかたきゆづるとてこをゆるしてぞおやもすすめし	二八六　やみにのみまどひきつれど契りてし友ぞみちびくしるべなりける	又如一眼之亀値浮木孔而我等宿福深厚生値仏法 五一　ひとめにてたのみかけつるうきゝにはのりはつるへきこゝちやはする	本無歌
普賢菩薩品	四五四　行すゑの法をひろめにきたりけるちかひをきくがあはれなるかな	二八七　たづねくる契しあれば行末もながれて法の水はたえせじ	宝威徳上王仏国遥聞此娑婆世界説法華経与无量无辺百千万億菩薩衆共来聴受 五二　たつねきてのりをきゝけんそのときにあはていつしかありしわかみそ	一七三　ま心に見つの七日をたのまばやはつかにあまるたのもしをせむ

道長・斉信・行成の現存する法華経歌

※　本文と歌番号は日本文学 Web 図書館所収『新編国歌大観』による。

『新古今集』釈教歌

法花経廿八品歌、人人によませ侍りけるに、提婆品の心を

法成寺入道前摂政太政大臣

一九二七 一九二八　わたつ海のそこよりきつるほどもなくこの身ながらに身をぞきはむる

勧持品の心を

大納言斉信

一九二八 一九二九　数ならぬ命はなにかをしからむのりとくほどをしのぶばかりぞ

『新勅撰集』釈教歌

法成寺入道前摂政家に、法華経廿八品歌よませ侍りけるに、序品

権大納言行成

五八二　むかし見し花のいろいろちりかふはけふのみのりのためしなるらむ

五百弟子品

法成寺入道前摂政太政大臣

五八三　きてつぐるひとなかりせば衣手にかくるたまをもしらずやあらまし

『続後撰集』釈教歌

人人に同廿八品の歌よませ侍りける時、勧持品

法成寺入道前摂政太政大臣

五九五 五八七　うへもなきみちをもとむる心にはいのちも身をもをしむものかは

寿量品

五九六 五八八　人めには世のうき雲にかくろへて猶すみわたる山のはの月

『玉葉集』釈教歌

おなじ品（稿者注―方便品）の心を

権大納言行成

二六四五 二六三二　世の中にいでといでます仏をばただひとことのためとしらなん

『万代集』釈教歌

法成寺入道前摂政、人人に法花経の歌よませ侍りけるに、方便品の心を

民部卿斉信

一六六〇　身のうちにほとけのたねはありけるをはかなくほかにもとめけるかな

信解品

法成寺入道前摂政太政大臣

一六六一　としふれどおやともしらぬ子にあひていまはたか

らをまかせつるかな

授記品

一六六二　たねくちてほとけのみちにきらはれし人をもすて
ぬのりとこそきけ

弟子品

一六六三　いまぞしるころものうらにかけたりしたまたま酔
のさむるほどとは

（ふぃっとれる・あーろん　本学大学院博士後期課程）